

お金を「もらう」ということ

京都府・京都府立洛北高等学校附属中学校 3年 市川 葵

夏休み、特に予定がなく退屈な日に、同じ市内に住む祖父母宅へ遊びに行った。宿題をしたりパズルを解いたりしていると、祖母に外の駐車スペースを掃除してほしいと言われた。私は家の外の草むしりや枯葉集めがわりと好きなので、喜んで仕事に取りかかった。

掃除が終わって部屋に戻ると、祖父が100円をくれた。私は嬉^{うれ}しくなって、祖父に礼を言った後、パズルの謎^{なぞ}解きを再開した。

と、ここでふと考えてみた。この100円には、一体どういった意味があるのだろうか。私が何も考えずに受け取った100円は、私のやった仕事にふさわしい額なのか。

じゃあ100円で何ができるか考えてみようと思った。100円ならコンビニで板チョコが1枚買える。私は部活なんかでもものすごく疲れた日に、チョコレートを食べると元気がでる。このときの100円は、一日の疲れ^{いや}を癒してくれる。また、テレビでファストフード店の

「100円あったら…」

というコマーシャルを見かけるときがある。私達中学生にとってファストフードは遊びに行った時欠かせないお昼ごはんである。このときは100円が友達との楽しい食事を彩ってくれる。

身近な例を挙げてみたが、もっと大きなものに目を向けてみると、100円でもユニセフに募金ができる。ユニセフによると、その100円で子供たちを下痢や脱水症状から救う薬が12袋、またはワクチンが6回分買えるという。このとき、100円で何人もの命を救うことができるのだ。

これほどの価値がある100円を、と私は思った。果たして私は受け取るに値する仕事ができただろうか。

自分の仕事ぶりを振り返ってみた。ほうきとちりとりを使って、15分ほどの掃除をした。その間に、途中から妹が参加して、手伝ってもらったりなだめ

すかしたりしながら作業をした。ホコリや落ち葉は、目につくものは全部取り除けたけれど、こまかいチリや落ち葉くずは適当に払っただけの所もあった。

こうして振り返ってみると、自分のやったことに、それ相応の金額をつけることはとても難しいことに気がついた。これは100円の価値がある働きだったのか、明確な結論は出しにくいと思ったのだ。

私は掃除を楽しんでいた。掃除中はぼんやりしたり、取りかかっているパズルのことを考えたりしていた。妹とおしゃべりしながら作業していた。私はお駄賃がもらえることを知っていて、それが50円か100円くらいなのだろうというものも察していた。こんな風に仕事に取り組んだ私は、お金をもらってもよい心構えをしていたのだろうか。

ボランティアと仕事の違いを一番簡単に説明したら、お金をもらうかもらわないかだ。私なりに結論を出すと、お金をもらっても良かったと思うし、祖父母と孫という関係なのだからこんなに堅苦しく考えなくても、もっと気楽で構わないと思う。ただ、これをボランティアでやっても良かったし、成人して社会に出てもらうお給料だったら、ボランティアじゃなくてお金をもらうということに、もっと今まで以上に義務感や誠意をもって返さなければ、とも思った。お金は自分が一生懸命働いたことの証明で、金額とはまた違った価値がお金にはあるんだなと、私はその時に初めて気がついた。

もちろん、だからといってボランティアなどの無償で働くことをおろそかにしてはいけない。タダ働きは善意からできることで、お金をもらうこと以上のやりがいを感じられたり、金額に関係なく充実感が得られることが一番の魅力である。得られる満足感は、精一杯取り組めば取り組むほど大きくなるだろう。

私が今回もらったのは100円だったけれど、大人になって自立したらその金額はもっと大きくなるし、仕事もずっと難しくなる。それなら誠意をもって取り組むことはもっともっと大切になってくるだろう。

また、そうやって得たお金は、使い道も変わってくると思う。自分の働きにだれ誰かが価値をつけて払って下さったお金なのだ。大切に使わなければもったいないだろう。

これからは、お金をもっと大切にして、たくさん働いて有意義にお金を使おうと思った。

そして、大人になってもこの気持ちを忘れずに、お金を「もらう」ために人一倍努力しようと思った。

